

置する村名である。荷札として用いられた可能性が高い。(7)は幅一・二m、深さ五〇cmの屋敷を画する溝内より出土した。陶磁器類からこの溝は一九世紀に廃絶したものとみられる。長方形の柵目材の片面に人名が墨書されている。上部中央には穿孔がある。
なお、木簡の釈読に際しては茨木一成氏のご教示を得た。

(稲原昭嘉・山下俊郎)

兵庫・袴狭遺跡^{はかざ}(内田地区)

- 1 所在地 兵庫県出石郡出石町袴狭字内田
- 2 調査期間 一九九六年(平8)四月～十一月
- 3 発掘機関 出石町教育委員会
- 4 調査担当者 小寺 誠
- 5 遺跡の種類 郡衙跡か
- 6 遺跡の年代 奈良時代・平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(出 石)

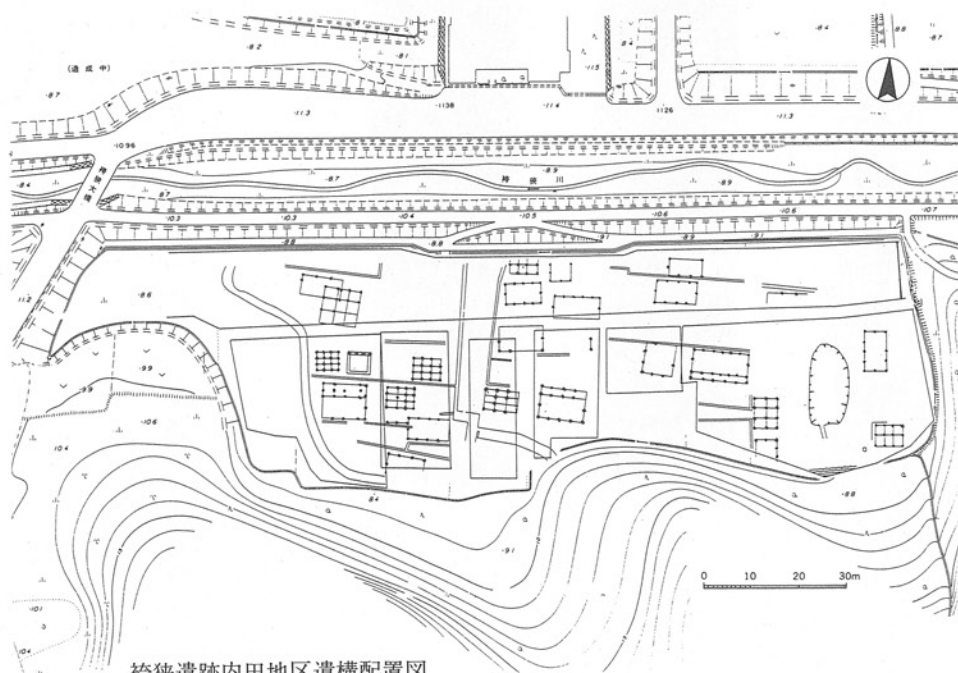
袴狭遺跡は兵庫県北部の出石郡を流れる出石川の支流、袴狭川流域に確認された遺跡で、特に奈良・平安時代の大量の木製祭祀具の出土で知られる。また周辺には砂入遺跡・荒木遺跡・田多地小谷遺跡・入佐川遺跡など、官衙をうかがわせる遺物の出土する遺跡が所在し、これらを一括把握して「袴狭遺跡群」と称している。このうち、袴狭遺跡では合計四〇点以上の木簡

が出土している（本誌第一一・一三―一七号）。

このような状況の中、一九九二年より継続して調査を実施している内田地区では、礎石建ち総柱の倉庫と思われる建物や水路跡が見つかり、当遺跡群の中心的な官衙に関わる施設と判断された。さらに、この地区からは、唐鏡（草花飛鳥八稜鏡）・石帯・銅銭・鍔・鉞・滓・フイゴ羽口・墨書土器・施釉陶器・木製祭祀具など、豊富な遺物も伴出している。また兵庫県教育委員会によって一九九四年にこの地区の北半の発掘調査が実施され、これまでの調査と同様の建物遺構や銭貨・腰帶装飾品・墨書土器などの遺物が検出された。

本年はこのうち内田地区東側の一五一四㎡と西側八二一㎡の調査を実施し、礎石建物四棟、掘立柱建物四棟、道路状遺構二、溝一〇条、池状遺構などを検出した。また伴出した遺物には施釉陶器、木簡、墨書土器、硯、木杓、木製祭祀具、曲物、鉞、砥石などがあり、特に東側地区で三〇〇点近い墨書土器の出土が目された。層序は、中世の遺物包含層、九世紀代の建物群検出面とこれを覆う遺物包含層、八世紀代の遺物包含層の順である。木簡のほとんどは、八世紀の包含層から出土したが、(7)は九世紀前半の排水溝から、(16)は室町時代の包含層から、それぞれ出土した。

8 木簡の釈文・内容



(1) 〔符〕〔石郡司カ〕
〔国府出〕□□□□□□

□ □

・ 天平勝宝七年五月 五日文□□

(550) × 50 × 10 019 *

(2)

〔延暦十四年三月十七日

余戸里長所進稲十五□□
少□□□所進□□
〔坂カ〕〔稲カ〕

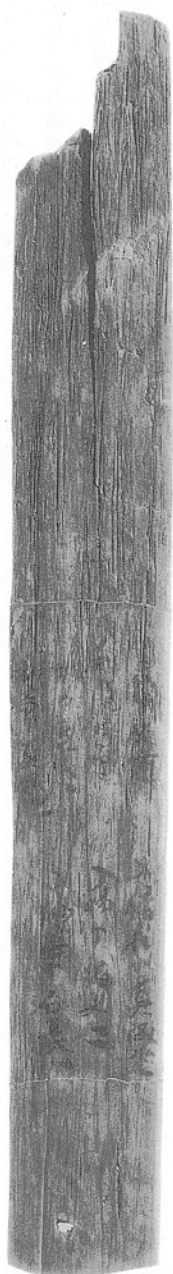
把定 又二日定九把 又□□□□ (コノ他削リ残リノ墨痕アリ)

(507) × 25 × 5 019 *

(3)

〔∨□□□□□石高椅郷∨〕

209 × (30) × 4 031



(4)



(7)



(13)

(6)

・「八月十日□□□□

卅井

清少二井
□
清貞二井
□
二井
□
二井
□

子三九一井半余
財吉二井
貞長二井
弘主二井
成人二井

清方二井
常庭三井
弘世二井
豐足二井

内繼二井半
□
毚丸一井半

八月十一日

八月十五日

神□^{〔人カ〕}

稻主□
稻主

八月十日六□□□^{〔十四カ〕}

同日卅一井

合九十五井

□人五人荷十二井

八月十二日□

(347) × 75 × 8 019*

(7)

七十万

又人四人□

卅九

方
丸二

(207) × (26) × 4 065

(8)

田者

(106) × 36 × 4 081










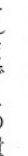
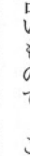















(9)

副廿留

阿知麻呂廿留

吉成廿□

(464) × (22) × 6 081

- (10)                          

おり、そういった施設の存在も想定されよう。

さらに「少野祝□」と書かれた墨書土器が見つっている。当遺跡の所在する地域は小野地区とも呼ばれ、内田地区の北約八〇〇mに式内社小野神社が存する。関連が注目される。

なお本年の調査により、この地区のほぼ全体の調査を終了し、建物群のほぼ全容を明らかにすることができた。西側には礎石建物の倉庫群が建ち並び、中央には廂をもつ居館が、さらに東側には池状遺構があり、池の東側にさらに付属建物を取り付く。これらの点から、この施設群は役所の政庁といった中心的施設ではなく、墨書土器から九世紀代においてはこの遺跡が出石郡衙であったとすれば、あるいは「館」のような施設ではないかと想定される。

ただこの遺跡群の発見の経緯は数万点ともいわれる大量の木製祭祀具の出土であり、たとえ長期間祭祀が実施されたとはいえ、内田地区の役人たちだけで消費されたとは考えられず、その祭祀遺跡としての性格の解明はできていない。今後の調査の進展が期待される。なお釈読にあたり奈良国立文化財研究所の方々のご教示を得た。

9 関係文献

出石町教育委員会『袴狭遺跡内田地区発掘調査概報』（一九九五年）

（小寺 誠）

兵庫・祢布ヶ森遺跡

第一九次調査出土木簡（続）

兵庫県日高町の祢布ヶ森遺跡は、県北部を北流する円山川流域左岸、標高約三〇mの小扇状地先端部に位置している。遺跡は広範囲に及び、従来の調査で検出されている遺構や遺物、特に遺跡の所在する旧気多郡以外の但馬の郡名を記した題籤軸が出土したことから、但馬国府跡（延暦二三年移転後）と考えられる遺跡である。

既に本誌一八号において、日高町教育委員会が一九九五年度に実施した第一九次調査で出土した木簡を報告したが、その後の整理作業で、二間×九間の南北棟の掘立柱建物の柱穴の掘形の中に、さらに一点の削屑があることがわかった。釈文は

□□ (6.2×0.5)×0.5 081

断簡であり判読不能である。また、この建物に並行して走行する溝からは、土器に付着した漆紙が出土しており、今後の精査が期待される。

（加賀見省一）